明治村
だより

2001 Spring

春号
Vol.23

目次

世紀を超えて―明治村からの提言―　飯田　喜四郎　…2
計……7
シアトル日系福音教会修理工事　西尾　雅敏　……8
館蔵資料紹介　十一　キリスト教掛図　平木　綾子　10
蔵書紹介　五　本の装い―装幀の美　遠藤　照子　12
ミュージアムショップから　6　……13
明治村花図鑑　3　カタクリ　……14
春の明治村　……15

表紙写真　内閣文庫とユキヤナギ

『明治村だより』
第二十四号発行のお知らせ
発行時期　平成十三年七月（予定）
申込方法　「明治村だより」第二十四号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料一四〇円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

平成十三年三月十五日発行
「明治村だより」第二十三号（平成十三年春）
発行　博物館明治村
愛知県犬山市内山一番地
電話（〇五六八）六七―〇三一四　〒四八四―〇〇〇〇
ホームページ◎http://www.meijetsu.co.jp/meiji-vill/
製作　大日本印刷株式会社

世紀を超えて

明治村からの提言

飯田喜四郎（当館館長）

「ローマは一日にして成らず。」

完成している物を賞賛することはやさしい。しかし、そこに到るまでの時の積み重ねを思いやることは難しい。結果だけではなく、経過それ自体も大切であることを、この格言は言っている。あらゆる物が容易に手に入る現代、その言葉の意味はより深くなって来たと思われる。知、徳、体などの要素があって人となりが造られているように、世の中を紡いでいるものは、物であり、技術であり、人の繋がりであり、それらの時間的な積み重ねである。それが歴史であり、経験が人を育てると同様、歴史が世の中を育てて行く。歴史を無視しては健全な社会は造れない。

明治元年は遠く、あしかけ三世紀前になった。博物館明治村の建物は移築されてからでも四十年近くたとうとしており、そのうちの半数くらいが創建後三世紀目を迎えたことになる。その間に博物館明治村の評価は世界的に定まった。海外からの来館者の姿が目立つのを見れば、そのことが理解できる。更に言えば、海外からの来館者には建築分野、歴史分野、芸術分野の人々が少なくない。何故、海外の人々の間で博物館明治村の展示物が注目されるのか。東洋の島国日本の歴史、しかも明治時代と言う特異な期間の文化財に限って集められている博物館である。その理由は、戦後日本の急速な発展の基礎が明治時代にあると考えるからだろう。或いは、日本の庶民文化の基本的な形や、民間技術の飾らない姿を、まとまって見られる唯一の場所だからである。江戸から連なる伝統技法を残し、文明開化の西洋技術の影響を受け、しかも、日本の近代への過渡期数十年の流れを一望に見ることが出来る場所だからである。様々比較することによる理解のしやすさも見逃せない。いくつかの隠れた姿を挙げてみよう。

国の重要文化財建造物に指定されている多くの建物の中でも親しみの持てる建物が東松家住宅（写真1）である。少し以前の普通の商店、の雰囲気を保っている。その中に、私達と同じ普通の人々の汗の結晶が様々な形で残り輝いている。一階奥の座敷、明治初年頃にしつらえられた形ばかりの、しかし確かな造りの床の間がある。部屋境の欄間も素朴な彫り抜き欄間である。商売繁盛の結果、明治三十年代に入って、二階以上を増築した。そこでは優雅な茶の湯の世界を建物の中に取り込んでおり、二階に組み入れた茶室とその露地のたたずまいは、とくに見事である。店の入り口から裏庭に通じる土間は、四層を吹き抜く豪快な空間で（写真2）、これに比肩する立体的な構成は帝国ホテル（写真3）にしか認められない。この住宅には杉の板戸に岩絵具で花鳥を描いた「杉戸絵」も登場している。櫛型欄間には太い竹をあしらって飾りとしている。これなどは西園寺公の坐漁荘（写真4）にも同じ造作があるが、知恵と手仕事の成果で、金銭では計れない粋な意匠である。

大正から昭和初期に作られた坐漁荘の中には、造作職人の優れた技がたくさん生きている。この時代、日本の大工技術は最高のレベルにあった。数奇屋風の構えをした玄関に入り、式台の板が薄いことに先ず驚かされる。端を踏むと割れそうだが、隠れた仕掛けがあって、割れない。板の裏に真鍮の骨が何本か埋め込まれているのである。庭に面したサンルームには南側と東側に窓があり、南側の窓の雨戸は、角で止まらずに九十度回転して方向を変え東側の敷鴨居を北進して戸袋に引き込まれる（写真5）。窓上には日除けテントがあるが、これなどは名古屋城近くの旧家が集まる白壁地区の家にも使われており、さらに言うなら、パン屋などの店先の日除けと同じもの。二階に上り、座敷境の欄間を見ると、決して豪華ではないが、手の込んだ板がある。桐の板の真中に太鼓落しされた竹が埋め込まれている（写真6）。良い物、使いやすい物、小奇麗な物は、何でも取り入れる。金銭評価ではなく、住みやすいか、気持ちが良いか、そのあたりに基準があるらしい。

重要文化財に指定されている官庁建物に明治十二年創建の三重県庁舎がある。その天井（写真7）には和紙が張り上げられている。白い胡粉で雲形の模様が浮き出しているが、全体に淡く光るのは、雲母の粉が薄く塗られているからである。時がたつにつれ、紙がわずかづつ色を濃くし、やがて絹のような光沢の紙となる。しかも、和紙は空気中の湿気を吸

写真1　伝統技法が生きる東松家住宅（左）と中井酒造（右）

写真2
東松家住宅土間吹き抜き
層構成の中に自然光をたくみに取り入れている

写真3
帝国ホテルロビー吹き抜き
自然光と人工照明が融合している現代的空間

写真4　坐漁荘畳廊下の竹を使った欄間

写真5　坐漁荘サンルーム　雨戸が廻る出隅

写真6　坐漁荘二階座敷　竹と桐の欄間

ったり吐いたり、いつまでも弾力を失わず、長ければ三十年くらいは傷まない。目立たないが、息の長い日本の技である。

三重県庁舎の正面に二重橋飾電燈がある。明治二十一年明治宮殿の完成に合わせて、二重橋の鉄橋の袂を飾った背の高い照明器具である。夜、五つの硝子グローブが放つ光は朧月のように淡い。しかし、日中見上げると巨大な枇杷を抱えた大樹の雰囲気である。鋳鉄で造られた枝の一本一本、葉の一枚一枚を観察すると、細い葉脈まで鋳出されている（写真8）。この飾電燈を四隅に従えた鉄橋の側面は、中央に尾、両端に頭を置いた二頭の見事な龍をあしらった鋳鉄板で飾られていた。龍は改鋳されてしまったが、この飾電燈にみられるように、十九世紀の鋳造技術は最高の域に達していた。鉄橋付近は風が強く、グローブは破損し易かったため、いつでも交換できるよう、予備のグローブが常備されていた。高さ七十センチ、直径六十センチ、岐阜提灯程の大きな硝子グローブは手吹き硝子である。薄すぎれば風にも割れてしまう大きさのため、硝子の重さも相当で、このグローブを吹くことは並大抵ではなく、技量と体力の勝負である。昔日本人の手で作られたこの吹き硝子も、今、日本人でこれをこなす人は少なくなり、中近東からの出稼ぎ者の体力に依存しているといわれる。

明治初年京都御所近くに建てられた中井酒造には江戸時代から現代まで続く伝統的な建築手法が残っている。元来、建物に使用する材料は手近なところで豊富に用意できる物を主とする。中井酒造の屋根裏を見上げると、曲がりくねった太い木が屋根を支えている。曲がった木が垂れ下がっているのではなく、猫が背を曲げているように、むくり上がったカーブに沿わせて屋根が載っている。自然に生まれた木の姿と性質をそのまま建物の力に生かしている。

建築理論が深められ、建物の姿形が王侯貴族の権威の象徴から離れて社会全体の豊かさの証に変化した二十世紀、世界をリードした建築家の一人にフランク・ロイド・ライトがいた。彼の設計した帝国ホテルには、軟らかくて温か味のある大谷石が内外各所に使用されたが、それとならんで大量に使われた硬い煉瓦（写真9）にも柔らかく見せる工夫がある。平らな硬い煉瓦の表情を柔らかくするため、細い溝を刻み込んだ。弁当箱のような木型に詰めた粘土の柔らかい表面を、釘を植えた板で引っ掻いて溝を彫り込む。たくさんの女性達によって刻まれた溝が皇居前に建つ帝国ホテルの全ての壁面を温かく見せていたのである。帝国ホテル完成の後、首相官邸など日本のあちこちで同じ手法が真似られ、市販のタイルにも模造品が流行したことを見ても、その意味の重さが知れよう。スダレ煉瓦のスダレには機械では造り出せない人々の手の温もりがあった。

明治村には宮内庁から儀装車が寄贈されている。西欧における王朝時代以来の馬車文化が日本の皇室に伝えられ、優雅な馬車となって遺されているものだ。扉には金色の菊の御紋が飾られている。大切に磨けば磨くほど、時と共に、金も削り去られてゆく。金箔補修は当館の建築部長が、漆職人に教わったとおり丁寧に箔押しをしている。建築部長によれば、金閣寺のように大きい物は腕の良い職人を必要とするだろうが、小さな御紋程度なら、誰がやっても程ほどに出来るという。失敗を恐れず、あせらず、ゆっくりと、何度でもや

写真7　三重県庁の天井　和紙貼

写真8　二重橋飾り　伝統の鋳鉄製腕木

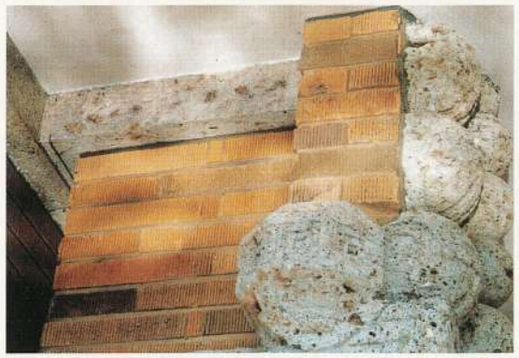


写真9　帝国ホテル　手造りスダレレンガ

り直す気構えさえあればできると言う。「人間国宝も初めは素人」彼が柿葺き職人から聞いた言葉という。

今、IT革命の時代といわれている。ITとは情報技術のこと。その革命の末には、情報のやりとりが急速に進歩し、次から次へ新しい情報を得、その情報に依って新しい生き方が造られて行く、という。しかし、多くの人々が見落としがちなことがある。情報技術の発達は、けっして情報の内容そのものの発達や充実を意味していないのである。今からわずか半世紀前には、西洋建築史の分野において、それぞれの時代毎に基本的文献とされるものは数十冊を越えることはなかったので、そのすべてに眼を通すことができた。新しい研究成果のうち単行本になるのは、古典的な価値を認められたものだけであった。しかし、現在では印刷物の年間刊行数は一万点を越えるまでに肥大化した。研究成果は内容のいかんを問わず容易に出版物として出廻るので、その価値判断はきわめて困難になった。情報についても同じようなことが起こらないという保障はない。

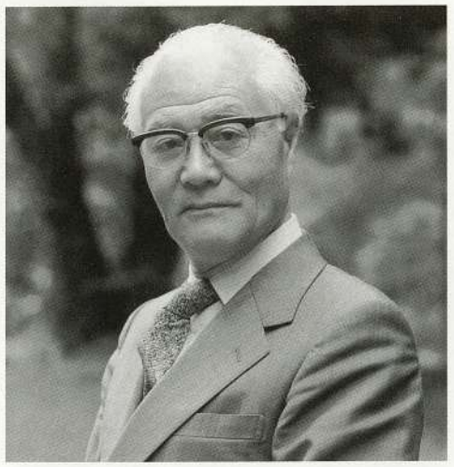
容易に入る物は、すぐに忘れ去られる。一夜漬けの勉強が余り長続きしない知識であることは、誰もが知っていよう。情報の早さは一面において強力な武器になるが、そうして得た情報が消え去ることも早いことを記憶しておかねばならない。他方、汗水たらして得た知識は容易に忘れられないのと同様、時間をかけて造られた物が持つ重みは、人の心を掴んで離さない。IT革命によって生まれる情報手段に載せる情報は、長い時間によって磨き上げられた物でなければ、堪えきれないのである。本物志向の正確な意味合いがそこにある。ここで、「あせらず、ゆっくり」は経済的な無駄とする考え方を捨てねばならない。健全な生活のために、良い物を作り出すという、人の力、人の技は金銭には換えがたい価値なのである。

建築は総合芸術である。また、伝統的建築を技術的にみれば、常識の集積物である。現代建築では建築家が主題を解釈し、作品に個性を表出する点がブラックボックスになるが、基本的な考え方は常識を出ないのではないだろうか。何故なら、風土の条件、人々の要求は古今変わらないからである。世紀を超えて永らえている建物には、確かな技術が生きている。昔はその技術の一つ一つが庶民の常識であった。勿論、上手下手はあるが、日本と言うこの地の風土に根ざした具体的な経験技術だから、誰でも見知っていた。土地に生まれた資源を有効に使う知恵があった。金銭に頼るのではなく、手足のわずかな力を生かした成果があった。そのような生活常識の積み重ねが温もりとなって、人々の身と心を癒してきた。また、風土から生まれた常識には、風土に起因する危険を回避する知恵も含まれていた。現代、その微細な知恵や常識が失われつつある。その喪失感が現代の焦燥感、未来への不安感の主因ではなかろうか。

伝統的材料と構法で造られた日本の住宅は、土と木と紙で作られたウサギ小屋と酷評された時代もあった。その海外の人々が、今、日本の伝統技法から生まれた建物や家具調度を見直し始めている。土を選び、木を捜し、海の幸も取り込んで、人々の手で暖められながら作られたもの。日本には日本の風土があって成立した文化がある。海外には、それぞれその地の風土によって生まれた文化がある。欧米中心の一元的な文化理解ではアジアやアフリカを正しく評価することはできない。後者の文化を尊重し、その中で育まれた物を世界遺産として評価するのに戦後の長い年月が必要であった。

日本各地の文化遺産が世界遺産として認められつつある現代、我々自身が自国の文化を誇りを持って学び直す時ではないだろうか。明治時代に過去の文化的蓄積の上に立って異なる欧米文化を選択的に摂取して現代文化の基礎を築いたように、過去の知恵をもう一度取り戻し、二十一世紀を実りある世界に仕上げねばならないと考えられる。

訃



博物館明治村二代目館長で現在は財団法人明治村顧問である関野克博士が、平成十三年一月二十五日満九十一歳にて永眠致しました。

初代館長谷口吉郎博士の遺志を継いで昭和五十四年に就任してから平成三年まで、十二年余りの長きにわたり館長を努め、明治村の発展に寄与されました。

関野博士は明治四十二年、建築史家関野貞氏の長男として東京に生まれ、昭和八年東京帝国大学工学部建築学科を卒業、大学院を経て東京大学に三十年奉職されました。東京大学教授を併任しながら、文化財保護委員会事務局建造物課長および東京国立文化財研究所所長を努められました。大学では専門の建築史で後進の指導に尽力されるとともに、建築を中心とする文化財研究の発展に寄与され、文化財保護行政の分野においては国内のみならず、広く海外とも協力しその業績は特筆すべきものがあります。

昭和四十八年には古建築復原の業績に対し日本建築学会賞を、平成元年に国際記念物遺蹟会議（イコモス）よりガゾーラ賞を受章、平成二年文化財保護の分野で初の文化功労者に選ばれました。

博物館明治村における業績としては、開村前の昭和三十六年から設立準備委員として参画され、翌年財団評議員となり、建築委員として移築候補建造物の選定と調査研究に携わっています。昭和四十二年理事、昭和四十九年常務理事に就任しています。館長を退任されてからも顧問として側面から明治村の発展に協力されていました。

館長在任時代の移築建造物は、北里研究所・菊の世酒蔵・帝国ホテル中央玄関内部完成・内閣文庫など十数棟にのぼります。谷口館長の仕事を継承して由緒ある建造物の保存に努めるとともに、これら建造物の整備と資料収集や展示活動、移築報告書の発行など博物館としての学術的内容を充実させることに尽力されました。当館を単なる建物保存の施設ではなく名実ともに充実した野外博物館へと発展させた功績は多大なものがあります。

なお、葬儀・告別式は、二月十日、東京文京区の護国寺においてしめやかに執り行われました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

シアトル日系福音教会修理工事

西尾雅敏（当館　建築担当部長）

移築後十六年を経たこの建物の外装は自然の中でかなり傷んでいた。屋根に葺かれているアメリカ赤杉の板は、見た目には形を保っていても、黒ずんで力は失せ、強い風には耐えられない物と変質していた。

板屋根の葺き替えが主たる修理内容のこの工事を計画するにあたり、第一の課題は材料の調達であった。鋸で製材するのではなく、鉈などで割って作る板（正確に言えば、片面割り肌、片面鋸びき）、しかも長さ六十センチ、幅二十センチ前後、厚み二センチの杉板を、二百二十平方メートルの屋根面分用意せねばならぬ。嘗て緑の国であった日本でも、現代そのような材料を用意することは不可能に近い。途方も無い値段となる。アメリカに創建された建物の材料は、やはり北米の方が手に入り易かろうと、アメリカに調査範囲を拡げた。インターネットで屋根材メーカーを検索、シングル葺きルーフィングに絞ると十数社ある。或る会社のホームページを詳細に読めば、この葺き方は「シングル葺き」ではなく「シェイク葺き」とある。細かい仕様も確認して、同種のメーカー数社に見積りを依頼した。十日程の後に二社から返事が郵送されて来た。一社は見本も添えて。値段に倍の開きがあって、等級の違いである。「プレミアム・グレード」では、メーカー推奨の葺き足で平方メートル単価三十九ドル。「ナンバーワン・グレード」では十九ドル。その相違は厚みの揃い具合である。十六年前の移築当時の残余材料を取り出して見ると、「ナンバーワン・グレード」、しかし先方の推奨葺き足よりシアトル日系福音教会の屋根は細かく葺かれている。必要数量の計算をし直して、再三の遣り取りの後、改めて発注。

次に輸送と輸入手続きが課題となった。タウンページを開く。貿易会社の項から素敵な名前を拾って電話。面談して聞けば、スイスに本店を置き、世界中に二百数十の支店を持つ海運会社という。先方の木材メーカーへもカナダの支店から出入りしているとのこと。幸運なのか、本筋をたどれば当然の結果なのか。輸入まで、ことはとんとん拍子に運び、正式の発注から一と月と一週間後、アメリカ赤杉の板は明治村に届いた。建設会社を通した場合の値段は分からぬが、杉板、防水シート、棟押さえ等の材料代金と船賃、トラック代しめて、平方メートル単価四千九百円という安い買物となった。

葺き方は簡単。素人にも施工出来るようと言う配慮か、板一締め（約一平方メートル分）毎に、品質表示ラベルの裏に葺き方が印刷してある。工事を担当したのは、こけら葺きを本業とし各地の神社仏閣の屋根を手懸けている職人である。ただ、こけら葺き職人を戸惑わせたのは、ミリ単位の精度で葺いてゆくこけらとこのシェイク葺きの大雑把さの差であった。「百聞は一見に如かず」あとは写真をご覧あれ。

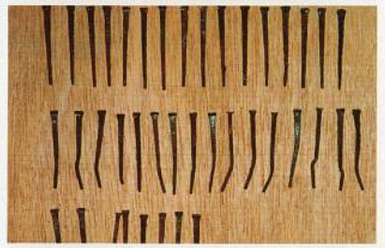
屋根葺替えのための足場は軒まで達する。それを利用すれば、傷んでいる外壁の塗替えも容易である。出窓の窓台も修理できる。この修理で思わぬ発見があった。二階窓台の受け飾りを固定していた釘である。二ミリ厚ほどの平板を細い楔形に打ち抜いて作ってある。長さ六十ミリで、頭の部分を叩いて少し開き「犬釘」のようになっているが、先端は平板のままで尖っておらず、余り堅い木材には打ち込めない、杉板だから使える釘である。十六年前の移築の時、この窓台は傷みがなかったので、バラさず再用したため、そのまま残っていたのである。

修理前
屋根板は黒ずみ外壁塗装は劣化

旧材除去後
野地板間隔は葺足に合わせてある。

耐火ボードを敷き込み、その上にアスファルトフェルトを敷き込みつつ、板張りする。

隅棟の留め作業
柾目のため、割れ易く歩留まりが悪い。



発見品
打ち抜き釘、長さ約六十ミリ

修理完了

軽微な木部腐朽箇所は人工木材を詰めて塗装下地とした。アラルダイトというその建材は練り上がった時粘土のように軟らかいが、固まると普通の木材のように切ったり削ったり、塗装も可能なものとなる。昔、接ぎ木や貼り木をした箇所を簡単に補修できる。

外壁の塗替えはざっと十年振りで、少し間が空きすぎた感があった。財源不足の理由によるもので、他の建物も同様の情況にある。当然、羽目板の傷みが懸念されたが、軒が深いことと、アメリカ産の当初材は日本の気候の中で比較的耐久性が見られ、状態は良好であった。通常の文化財修理現場では過去のペンキを完全に除去することが行なわれる。しかし、この建物は元来アメリカの庶民住宅であり、住人が日常的に塗り替えるが如く、ケレン用刃物で取れる程度にケレンして新しい塗料を塗り重ねた。だから、塗りあがった表面は結構でこぼこしている。修理完了の全景写真を見ると判るとおり、建具の色を変えた。ケレンした下地から昔の別色が現われたため、今回戻してみたものだが、塗装色は住み手が変わるたびに変えられた様である。ペンキ塗は、このように手軽で素朴な付き合い方で維持されているのが良いのではなかろうか。

さて、美しく化粧直しの終わったこの建物が村内のほぼ中程に位置する立地を生かして、建築質問室を開設した。玄関横、居間の一部に椅子とテーブルを並べ、アメリカの一般家庭の玄関ホールのような雰囲気を作り、書棚を隅において楽しいサロンのような質問室にしたいと思っている。図面を書きながら、或いは小さな造作、家具の修理をしながら応対しようという試みである。来村の折には気軽に寄って頂きたいと思っている。但し、村内の建物修理などに出歩いているので、備え付けのノートに疑問を記しておいて頂ければ幸いである。

館蔵資料紹介【十二】
キリスト教掛図

かつてキリスト教は、厳しい迫害と弾圧のため、一部の潜伏キリシタンを除いて根絶しにされましたが、開国により安政六年(一八五九)には宣教師が来日し、再び伝道と教育がはじまり、日本の近代化に大きな影響を与えました。日本の西洋化の必要を強く感じ、洋学吸収につとめていた青年たちによって、キリスト教は西洋文化の根底にあるものとして受容されていきます。英語学習を通じて宣教師に接し、信者になった者も多くいました。そうした若者や子供への積極的な伝道の手段のひとつに日曜学校（Sunday School）があります。

当館は平成八年に掛軸になった聖画六幅（横六十五センチ縦九十二センチ・一九〇五年）の寄贈を受けました。（図1）絵のそれぞれには上段に英語と日本語で題名と、その絵に相当する聖句(聖書の中のことば）と、その聖句の出典が説明されています。下段には英語で、いつの日曜日に用いるのか、日づけが指定されています。これらは、教会で子どもを対象とした日曜学校で、教材として使用されました。

このように掛軸状になった教材を「掛図」と言います。明治時代の小学校ではよく用いられました。この掛図も、聖書の話をするときに一枚ずつ取りだされ、絵を見ながら話をしたのでしょう。

明治三十年代、イギリスより二人の婦人宣教師 Miss Edith Emilie Hughes（姉）とMiss Alice Mary Hughes（妹）が北海道での伝道のために来日しました。日本では適当な教材がないため本国イギリスからこの聖画を、姉妹のどちらかが取り寄せたものと伝えられています。丁寧な軸装、日本語の書き入れは日本で行なわれました。姉妹はCMS（Church Missionary Society・英国聖公会宣教協会・イギリスの宣教団体のひとつ）に所属し、北海道で伝道をしていました。婦人宣教師の活動は、アメリカのものが主流と思われていますが、イギリスではアメリカより早く一八三四年に「東洋女子教育振興会」の名で婦人伝道局がはじまります。（アメリカで最初の婦人伝道局ができたのは一八六一年。）婦人宣教師による日本での活動は、当時遅れていた女子教育に先鞭をつけ、その近代化に大きく貢献したのです。

日曜学校は、一七八〇年にロバート・レイクス（Robert Raikes,1735年-1811年）がイギリスのグロスターで始めたものが起源であるといわれていますが、当時は宗教教育だけでなく、一般初等教育が行なわれていました。これがアメリカへ伝わると、宗教教育（Religious Education）の専門的機関として発展します。日本へはこのアメリカ式のものが入ってきました。日本最初の日曜学校は明治五年、横浜海岸教会にはじまりますが、主要な教育は、他国での日曜学校と同様、聖句と教理問答の暗記で、最初は問答書やカードが教材として使用されました。明治十年前後からは、全国の主要都市でも開かれるようになり、明治十五年頃からの欧化主義政策によって、キリスト教会とともに発展します。日曜学校の内容は、明治二十年頃までにはカテキズムの教育から聖書中心的なものに変わり、聖書を暗唱させることから、聖書を物語として教える方向へ、明治二十年以後は万国日曜学科（国際統一教案 uniform lessons）が行なわれるようになり、明治四十年には「日本日曜学校協会」が設立され、日本独自の教材テキストなどを編纂していきます。

明治四十二年の第三回日本日曜学校大会では、十一年制（幼稚科二年・初等科三年・中学科三年・高等科三年・年齢にすれば四才～十四才位）級別教科書編集を決議し、これは明治四十五年に完成します。この教科書は、教育心理学的配慮のもとに聖書教材を配案したもので、英米より早く独自のものを作製したことになります。

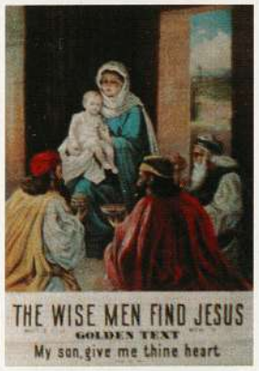
『中等科教師の友』（明治四十四年）（図1）では、幼稚科から初等科第二年まで、日曜学校の教師は手引き書にあたる『教師の友』の他に、「かけ圖（彩色）」、カード五十二種（一年分）を使用するよう奨励しています。また『幼稚科　教師の友』（明治四十一年）には「説明の材料」として「学課をおしゆる時に、圖畫は大なる助けを與ふるものであります。一度見たる學課相當の圖畫は、子供等が其學課を記臆するに、非常の助けとなるでありましょう」と、絵を見せて聖書教育をすることを薦めています。

同様のキリスト教宣教に関する視覚資料に聖ザビエル天主堂と大明寺聖パウロ教会堂に展示している「十字架の道行き」という絵画もあります。いずれも聖書によるキリストの生涯を描いたもので、これらを比較して見るのも興味深いかと思われます。

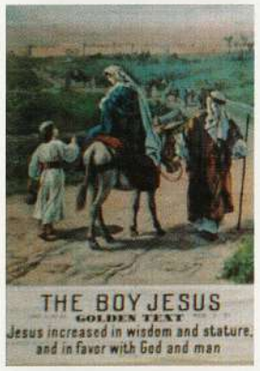
日本にとってキリスト教とは、単なる宗教としてだけでなく、その伝道とともにもたらされた思想や教育を通して、近代社会を形成する上で大きな影響を与えたものです。社会事業、医療、社会改良運動、女子教育、幼稚園、音楽、そして建築など多岐にわたります。

当館展示建造物聖ヨハネ教会堂は、礼拝堂が二階にあり一階は広間になっています。かつてこの一階部分が日曜学校の場として使われていたことを鑑みてこの掛図を展示しています。本来日曜学校の教材は常に表に出しておくものではありませんが、貴重な資料を広くお客様に知って頂くため、複製を作り常設展示しています。ご興味のある方はぜひご覧になって下さい。

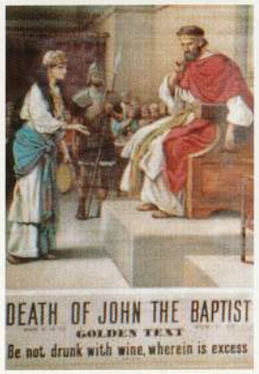
図1　日本日曜学校協会編
「中等科教師の友」　明治四十四年　教文館
「幼稚科教師の友」　明治四十一年　教文館



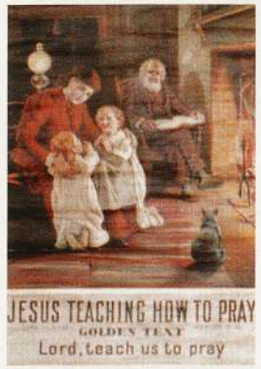
一　博士たちイエスに会う
イエスキリストの誕生を祝うために東方より三人の博士たちが来た様子を描いている。



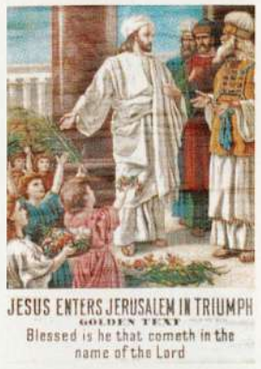
二　少年イエス
イエスが両親と一緒にエルサレムに入る様子を描いている。



三　バプテスマのヨハネの死
ヘロデヤの娘が舞の褒美にバプテスマのヨハネの首をヘロデ王に求めている場面を描いている。



四　イエス祈祷を教う
イエスが教えた「主の教え」を説明している場面を描いている。



五　イエスエルサレムに入る
イエスがエルサレムに入った時子供達がシュロの葉を手に称えている様子を描いている。

六　十人のむすめ
イエスキリストの再臨に常に備えておくことを教えるたとえ話を描いている。

主な参考文献

小林公一『キリスト教教育の背景』一九七九　ヨルダン社
小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』一九九二　東京大学出版会

平末　綾子（当館　学芸員）

蔵書紹介 ❺ 本の装い―装幀の美

装幀とは、本の製本と体裁を含めた総合的な技術・デザインをさしていう言葉です。本を購入する時装幀のよしあしで決めるという方はあまりいないと思いますが、たまたま入手した本の装幀がなかなか洒落たものであったりすると何か得をしたようでずっと大切に持っていたい気分になります。

現在のように専門家すなわち装幀作家（ブックデザイナー）が手がける分野であることが確立したのはそう昔のことではありません。戦後、造本装幀コンクールが始められたのがその発展のきっかけを作ったといえるでしょう。

本の製本はわが国では和綴本という伝統的な方法が伝えられています。和綴本はその綴じ方によって「四ツ目綴」「康熙綴」「亀甲綴」「麻の葉綴」「大和綴」などがあり、また綴じていない折本という形もあります。その体裁はごく単純なもので、表紙に題箋を貼り付ける他には紙質・色にこだわるという程度にしかすぎません。

明治以降に洋装本が登場してから本の形は変わり、丸型や角型のしっかりした背がつくようになりました。また外見デザインが注目されるようになり、この時期本の体裁にも和風・洋風・折衷とさまざまなスタイルが見られるようになりました。

当時の装幀者は主に画家で、のちに版画家や工芸家も加わりました。何れの場合も本業ではなく余技であったことが特徴といえましょう。大正時代から昭和初期にかけては、大正ロマンという美術界の潮流に乗って装幀の世界も華やかな最盛期を迎えました。

夏目漱石の作品「虞美人草」（明治四十年～東京朝日新聞連載）の文中に書店の硝子戸に陳列している奇麗な本を詳細に描写しているくだりがあり、『みんな新式な装釘だ』といわしめています。漱石はヨーロッパ留学時に外国の装幀の美しさに惹かれていたかと思われます。夏目漱石の多くの著作の装幀を橋口五葉が手がけたことは有名です。（図1）橋口五葉は黒田清輝に師事して洋画を学び、浮世絵研究ののちに版画家として活躍しました。彼の装幀は、ヨーロッパの影響を受けたアールヌーボー調が多く、本という小さいスペースに斬新な図案を調和よく生かした優れたデザインです。漱石のほか泉鏡花や（図2）谷崎潤一郎らの著作も手がけました。当館の蔵書にもこうした画家による装幀本が沢山あります。（図3・4・5・6）

装幀するにあたってはその著作の内容を考慮することが大事なことはいうまでもありません。作家の側からも自作をより効果的に宣伝するため装幀者を選ぶということもありましょう。現在出回っている新刊本にもいろいろと装幀に工夫をこらしたものが見受けられます。

いわば小さな芸術作品である装幀の美しさから書物を見てみるのも一興かと思います。

遠藤　照子（当館学芸員）

図1「吾輩は猫デアル」（復刻）
夏目漱石著　明治38年　橋口五葉装幀

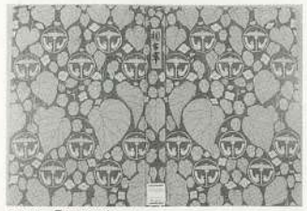


図2「相合傘」
泉鏡花著　大正3年　橋口五葉装幀

図3「わらはの旅」
森律子著　大正2年　杉浦非水装幀

図4「南座」
堂本寒星著　昭和4年　堂本印象装幀

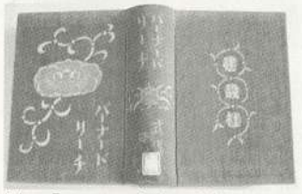


図5「バーナードリーチ」
式場隆三郎著　昭和9年　芹沢銈介装幀

図6「脳室反射鏡」
式場隆三郎著　昭和14年　棟方志功装幀

ミュージアムショップから ❻

今回は展示建造物⑭千早赤阪小学校講堂の中にある「招福づくし 猫本舗」をご紹介します。これは今人気の高い猫グッズを集めたショップで、平成十一年九月にオープンしました。

猫というと招き猫が一般的で昔から商売繁盛のシンボルとして親しまれていますが、一体何時頃から作られるようになったのか定かではありません。およそ江戸時代も後期になって今戸焼か伏見焼あたりで造られたものといわれています。

猫が顔を洗う時片手を器用に挙げるしぐさからあたかも人を招くように連想したのが招き猫のはじまりであろうと思われます。猫にとってはとんでもない誤解で人間の勝手な思い込みということになるでしょう。

ともかく右手を挙げるとお客を、左手を挙げるとお金を呼ぶとして商売人には欠かせないお守りとなったわけです。単なる飾り物として一般家庭にこのように広まったのは戦後の事です。加えて猫の色や持ち物に関してもいろいろなバリエーションが作り出されています。三毛猫は幸運を、白猫は福を呼び、黒や赤は厄除けといった具合です。

当ショップでは、招き猫をはじめさまざまな猫グッズを豊富に取り揃えています。人気商品は、陶器製のミニ招き猫（三九〇円）、猫の小風呂敷（五三〇円）等で、変わったところではウォーターボール（五二五〇円）といって音にセンサーが働き招き猫の下の小判が舞うというのもあります。

猫の好きな方もそうでない方も一度可愛い猫をご覧になって下さい。

明治村花図鑑 ③

カタクリ

今回は早春に咲くカタクリの花をご紹介します。カタクリはユリ科の多年生種子植物です。北海道から九州まで広い地域に分布し、山林や丘陵に群落を作りますが、全国的には減少傾向にあります。

根は鱗茎と呼ばれる白色のうろこ状で地中深くにあり、雪解けの頃地上に双葉を出してから十五～二十センチ程度まで茎を伸ばし、六枚の花びらをもつ紫色の花を下向きに只一つつけます。鱗茎から良質のでん粉がとれますが、これが正真正銘の片栗粉で、現在普通に店で売られている片栗粉はジャガイモのでん粉です。

カタクリはわが国古来の植物で古代から知られていました。「万葉集」にも詠われており、大伴家持の歌に

《もののふのやそおとめらがくみまがう
寺井のうへの堅香子（かたかご）の花》

というのがあります。

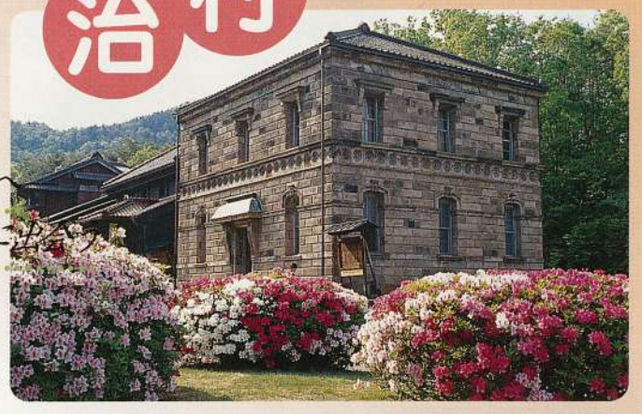
カタクリの異名はかたかご、かたこゆりで、花の形状から傾いた籠と呼んだのではないでしょうか。

明治村はもともと丘陵地帯を切り開いた地形にあるため、周囲の山の傾斜地には山野草の自生も多く見られ、カタクリの群生地があります。二、三年前からこの群生地の周囲を整備してカタクリ散策路を設け、お客様にご覧いただけるようにしています。場所は洋食屋浪漫亭の北側から㊹菊の世酒蔵へ向う坂道を少し登って右側の傾斜地を上がった所です。開花の時期は三月下旬から大体二週間あまりと比較的短いので、あらかじめお問合せの上ご来村頂きたいと思います。俯いて咲いているため、最初はちょっと見つけにくいかと思いますが、それだけに可憐なこの花をぜひ見ていただきたいと思います。

春の明治村

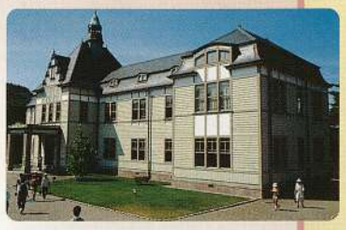
2001年3月17日(土)～6月3日(日)

2001年　時空の旅
―ドラマチック明治～
明日をつくった偉人に出会う



明治時代の偉人にゆかりのある建造物にスポットをあて、それぞれの建物の中で偉人のプロフィールを紹介。また偉人を楽しく学ぶコーナーも開設します。

④ 皇宮警察署別館（伊藤博文）
⑦ 学習院長官舎（乃木希典）
⑧ 西郷従道邸（西郷従道）
⑨ 森鷗外・夏目漱石住宅（森鷗外・夏目漱石）
⑰ 清水医院（島崎藤村）
㉕ 北里研究所本館医学館（北里柴三郎）
㉖ 幸田露伴住宅「蝸牛庵」（幸田露伴）
㉗ 西園寺公望別邸「坐漁荘」（西園寺公望）
㊼ 本郷喜之床（石川啄木）
㊽ 小泉八雲避暑の家（小泉八雲）
㊼ 帝国ホテル中央玄関（フランク・ロイド・ライト）



春 らん・らん・るん・るん開運広場

会場：千早赤阪小学校講堂
明治の衣裳を着た物売りが登場、おみくじや開運グッズを販売します。

第35回明治村茶会　4月13日（金）・14日（土）
第25回明治村剣道大会　4月15日（日）

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。